

トキの放鳥から10年： 再導入による希少鳥類の保全

コーディネーター：永田尚志（新潟大学）

第1部：希少鳥類の再導入

鴛島のアホウドリ：出口智広

（公益財団法人 山階鳥類研究所）

太平洋のクイナ類：尾崎清明

（公益財団法人 山階鳥類研究所）

第2部：トキの再導入

岡久雄二

（環境省佐渡自然保護官事務所）

永田尚志

（国立大学法人 新潟大学）



日時：2018年9月17日（月・祝）10：00～12：30（予定）

場所：朱鷺メッセ 国際会議場（マリンホール）

新潟市中央区万代島6番1号（JR新潟駅からバスで15分）

入場無料（事前申込不要）

主催：日本鳥学会

お問い合わせ

日本鳥学会2018年度大会事務局

〒950-8050 新潟市西区五十嵐2の町8050

新潟大学 研究推進機構気付

E-mail: osj2018.niigata@gmail.com

トキの放鳥から10年：再導入による希少鳥類の保全

趣旨：地球上の多くの地域で多くの生物が絶滅の危機に瀕しています。いったん絶滅した地域に個体を移植して個体群を復元することを「再導入」といいます。今年は、トキの放鳥10周年にあたり、新潟ではトキの野生復帰への関心が再び高まっています。鳥学会大会が新潟で開催される機会に、トキ、アホウドリ、クイナ類などの希少鳥類の再導入事例を比べてみます。この機会に、再導入による希少鳥類の保全を成功に導くのに何が重要かを考えてみましょう。鳥類愛好家のみならず、学生、多様な立場の一般の方の参加をお待ちしています。

講演者		コーディネーター：永田 尚志（新潟大学）
出口 智広	(公財)山階鳥類研究所	アホウドリ移住計画はどこまで進んだ？
尾崎 清明	(公財)山階鳥類研究所	太平洋地域のクイナ類の再導入
岡久 雄二	環境省佐渡自然保護官事務所	トキの野生復帰の取り組み
永田 尚志	新潟大学	トキの再導入はどこまで達成したのか？

アホウドリ移住計画はどこまで進んだ？：かつての乱獲により、一時は絶滅したと報じられたアホウドリは、その後の献身的な保全活動の甲斐あって、現在極めて順調に個体数を回復させている。しかし、残された鳥島の繁殖地は将来的な存続に不安があるため、過去に失われた小笠原諸島の繁殖地を復活させる取り組みを2008年にスタートした。本講演では、海鳥の置かれた現状と再導入の成否に関わる要因について触れた後、本移住計画によってどのような成果が現在までに得られたのかを紹介する。

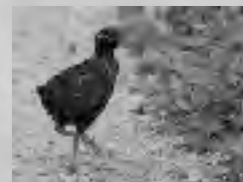


アホウドリの親子

太平洋地域のクイナ類の再導入：世界の130種余りのクイナ類のうち33種は飛ぶことができない。このうち、すでに13種が絶滅し、現存する20種のうち18種が絶滅の危機にある。これら無飛力クイナ類の大部分は太平洋の島嶼に分布している。絶滅の危機を招いた原因の大部分は、生息環境の悪化、外来種による捕食など人為的な影響による。すなわち島嶼に生息する無飛力のクイナ類は絶滅し易く、積極的な保全を実施しないと、近い将来に地球上から姿を消してしまうに違いない。これら絶滅の危機にある無飛力のクイナ類（グアムクイナ、ロードハウクイナ、ニュージーランドクイナ、ヤンバルクイナなど）の保全と、減少した個体群の再導入の実態について紹介する。



ロードハウクイナ



ヤンバルクイナ

トキの野生復帰の取り組み：佐渡島でトキの放鳥が始まってちょうど10年を迎える。継続的な放鳥と野生下での繁殖成功、そしてトキの生息を支える地域の取り組みによって、野生下のトキの個体数は増加を続けており、現在では約350羽にも達している。こうしたなかで佐渡島においては「絶滅してしまった保護すべき鳥」から「身近な地域の象徴」へとトキの認識も変化してきている。希少種保護増殖事業のトップランナーであり、生物多様性保全に配慮した地域づくりのモデルであるトキの野生復帰について、トキ保護の歴史、野生復帰の経過と現状について紹介する。



水田で採餌中のトキ

トキの再導入はどこまで達成したのか？：毎年、5月にトキの巣立ちがニュースとなり、傍目にはトキの野生復帰は順調に進んでいるようにみえるだろう。しかし、本当に順調なのだろうか？確かに、放鳥トキの2/3は最初の1年を生き残り、その後の生存率は驚くほど高い。最初の放鳥から3年間は、放鳥トキは野外で繁殖できず、2012年以降も繁殖成功率も低い状態が続いた。野外生れトキが増えてきた最近になって、ようやく個体群を維持できるまで野外の繁殖成績が改善してきている。ここではトキの再導入の成功に影響を与える要因を整理し、今後のトキの再導入の道筋を再点検してみる。